

平成 21 年 4 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2009

課題番号：18320032

研究課題名（和文） 古代ローマにおける弁論術の形成と発展

研究課題名（英文） Formation of the ancient Roman rhetoric and its development

研究代表者

渡辺浩司（WATANABE KOJI）

大阪大学・大学院文学研究科・助教

研究者番号：50263182

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学美術史

キーワード：芸術諸学

## 1. 研究計画の概要

本研究課題は、日本においてこれまで部分的でないし皮相的にしか言及されることのなかった古典弁論術に関して、歴史的な側面と理論的な側面との二面から考察し、古典弁論術とりわけ古代ローマの弁論術の形成とその後の西洋文化における発展について一定の俯瞰的な展望を与えることを目的とする。具体的には、以下の弁論術書を取り上げ、それぞれの理論的な側面を考察し、その上で相互の影響関係を考察する。古代ギリシアの弁論術書としてはプラトン『パイドロス』『ゴルギアス』、アリストテレス『弁論術』『詩学』、ヘレニズム期の弁論術書としては偽ロンギノス『崇高論』、古代ローマの弁論術書としては、キケロの『トピカ』『弁論家』『ブルトゥス』、クインティリアヌス『弁論家の教育』、そして現代における弁論術書としては、ヤコブソン、ジュネット、ペレルマンなどの弁論術書である。また近現代の芸術における弁論術の影響も考察する。

## 2. 研究の進捗状況

(1) 本研究課題の中心をなす古代ローマ弁論術において、最も重要な人物ないし著作は、古代ローマ弁論術の集大成であるクインティリアヌスの『弁論家の教育』全 12 巻とキケロの弁論術書である。このうち『弁論家の教育』については、第 3 巻から第 5 巻までに絞り、邦訳、研究をおこなった。その成果は、2009 年 3 月に、『弁論家の教育 2』（京都大学学術出版会）という形で世に問うことができた。また、第 1 巻から第 5 巻までの主要な術語のラテン語日本語対照表を作成した。

(2) もう一つの重要な人物ないし著作であ

るキケロの弁論術書については、目下『トピカ』の研究、邦訳にとりくんでいるが、(1)の研究に予想以上に時間を費やされ、おもうように進んでいない。ローマ法や論理学や修辞学などがふんだんに盛り込まれているという『トピカ』の著作上の性格も、研究を難しくしている。

(3) 本研究課題は、個別の弁論家ないし弁論術書の研究も重要であるが、他面では歴史的な影響関係という側面での研究も重要である。この点については、本研究課題の 2 年目から、研究会（通称弁論術研究会）を開催し、研究会という形で研究を進めてきた。これまでに開催した研究会を記せば以下のとおりである。

①第 1 回、2007 年 8 月 4 日、大阪大学、提題者：渡辺浩司、テーマ：エンテューメマ。

②第 2 回、2007 年 12 月 15 日、大阪大学、提題者：吉田俊一郎、テーマ：クインティリアヌスにおけるエートスとパトス。

③第 3 回、2008 年 8 月 9 日、大阪大学、提題者：戸高和弘、テーマ：文芸における崇高さとは何か―伝ロンギノス『崇高について』より。

④第 4 回、2008 年 11 月 2 日、大阪大学、提題者：萩原康一郎、テーマ：現代のレトリック論について、提題者：伊達立晶、テーマ：プラトンの弁論術論『パイドロス』―「文字文化」との対決。

このように、提題者は 5 名、テーマは古代ギリシアから現代にまでおよんでいる。研究会での研究成果は、まだ公表されていないものが多いが、古代ローマの弁論術の形成とその発展について一定の俯瞰を持ちうるまで

になっているといえる。

### 3. 現在までの達成度

①当初の計画の3分の2ほど進展している。  
(理由)

すでに「2. 研究の進捗状況」において記したとおり、古代ローマ弁論術の集大成であるクインティリアヌス『弁論家の教育』の第3巻から第5巻を翻訳し注を付し世に問うた。全12巻のうちの一部とはいえ、この刊行により、古代ローマ弁論術の概観をある程度与えることができるといえる。また、古代ローマ弁論術が後世に与えた影響については、数回にわたる研究会における討議をとおして、一定の俯瞰を与えることができるほどにはなっている。これに対して、古代ローマ弁論術の形成に重要な役割を果たしたキケロの修辞学書の研究は、あまり進んでいない。一つには、クインティリアヌスの研究に予想外の時間を取られたからであり、もう一つには、キケロの修辞学書の研究自体(注釈書)が古い物しかないからであり、いま一つには、毎年のように全国大会や国際学会などの開催に忙殺されるからである。

### 4. 今後の研究の推進方策

本研究課題は4年間の研究であり、したがって今後の研究期間は残り1年ということになる。残された1年間での研究は次のように進める予定である。

(1) キケロの弁論術の研究に重きを置き、研究会で、キケロの修辞学をテーマとして取り上げる予定である。

(2) 近現代の芸術における弁論術の影響をいま少し考察する予定である。研究会では、現代芸術論における弁論術の位置をテーマとして取り上げる予定である。

(3) 本研究課題のなかでは、成果を期待できないが、クインティリアヌス『弁論家の教育』全12巻のうち、第6巻から最後までを読解、邦訳することを続行する。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

①伊達立晶、エドガー・アラン・ポーにおける蟲、『大正ロマン』、33、14-16、2009、査読有。

②田之頭一知、ショパンの2つのバラード(作品23および52)をめぐって—その“歌”の根底にあるもの—、『藝術』、31、5-20、2008、査読有。

③田之頭一知、プラトン『ティマイオス』における時間の概念—「永遠を映す似姿」としての時間についての試論—、『藝術』、30、52

-64、2007、査読有。

④田之頭一知、リスト《超絶技巧練習曲》におけるタイトルの役割—詩的理念との関係をめぐって—、『藝術』、29、107-117、2007。

[学会発表] (計5件)

①渡辺浩司、アリストテレスとホメロス問題、「近代精神と古典解釈：伝統の崩壊と再創造」08年度第3回研究会、2008年11月28日、国際高等研究所。

②田之頭一知、武満徹における映画の位置—その60年代の映画音楽より、美学学会西部会第269回研究発表会、2008年7月12日、立命館大学。

③渡辺浩司、説得推論と感情効果—アリストテレス『弁論術』と『詩学』より、美学学会西部会第268回研究発表会、2008年6月7日、京都大学。

④田之頭一知、ショパンの4つのバラードをめぐって—第1番と第4番を中心に—、文芸学研究会第33回研究発表会、2007年12月22日、同志社大学。

⑤伊達立晶、ボードレールのパリ万博評とその余波、第57回美学学会全国大会、2006年10月8日、大阪大学。

[図書] (計1件)

①クインティリアヌス『弁論家の教育 2』森谷宇一、戸高和弘、渡辺浩司、伊達立晶訳、京都大学学術出版会、2009年3月。